

# 郷愁のユーコン

中野  
政男



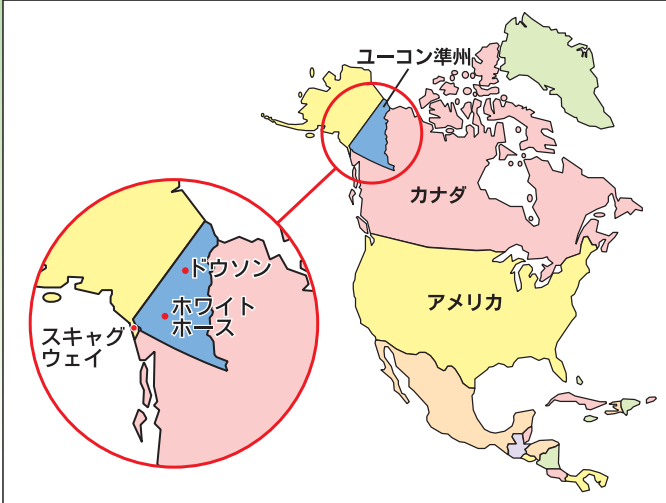
中野 政男 (なかの まさお)

大正9年(1920) 東京生まれ  
昭和20年(1945) 慶応大学医学部卒業  
同37年(1962) 紅谷町に皮膚科医院開設



ユーコン準州の旗

橈犬、雪と氷、川と森、夏にはアラスカを埋め尽くす Fire-weed (ヤナギラン) の花。



寒い毎が続きます。春の来るのが待ち遠しいのですが、世の中にはもっと寒い所があります。それは北極に近い所で、北極圏とか極北の地とか言われている地域で、その西の端のユーコンという所の話をします。

私が行ったのは雪のない時期でしたが、それでも雪と氷の世界という印象は深く心に残っているのです。

まずは地図を見て下さい。

アメリカ大陸の北の部分には北極圏といわれ、アラスカ以外はカナダ領、ほとんどが無人の境で、行政上、州 (state) にも出来ないのが、準州 (territory) 管区 (district) などに分けられています。その中のカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州の北。ユーコンと言う大河の水源地帯がユーコン準州で州都はホワイトホース。人も住まない雪と氷の荒野だったのが、1896年 (そんなに昔の話ではない明治29年の事) ジョージ・カーマックらが、クロンダイク渓谷で豊富な金鉱を発見して、たちまち「ゴールドラッシュ」が始まった。金に取り憑かれた10万以上の人々が、海に一番近いアラスカのスカグウェイの港から65キロ奥の険しい山岳を、幾多の峠と湖を越えて殺到した。人間の執念というのは怖ろしいもので、生活用品から山堀道具一切を馬に積み肩に担ぎ、数百メートルの絶壁にへばりつくようにして進んだものの、転落して死ぬ者は数知れず、峠のホワイトパス渓谷は転落した人馬の屍体



陸揚げされたスターンホイラー

で埋まったと言う。それでも4万人ほどが到着して渓谷の近くにドウソンという立派な街まで出来た。

カナダ西部から陸路で行くルートは、長距離、無人の曠野の難路で、1500人が3000頭の馬と出発して、到着したのは人間6人だけという凄まじい記録がある。

港から峠越えに鉄道を引いた人がいて1898年5月27日着工し7月迄に旅客列車がホワイトホースまで開通。人々はここからユーコン川を船で遡ってドウソンまで行くことが出来るようになった。

ホワイトホースは、日本語にすれば白馬、その名の由来は「ユーコン川の激流がこのあたりで白波を立てて、それが白馬が川を渡って居るように見えた」のによる。

今は飛行機で行ける。空港のターミナルはガランとした倉庫みたいで、アラスカハイウェイの走る丘陵から20mほど下に広がっている平地に街があり、ユーコン川がその境界を流れ、川の向こうは再び迫り上がって丘陵に連なっている。

こんな上流でもユーコン川は雄大で、滔々と渦を巻いて流れる緑色の水は流速6ノット、砂利石を敷き詰めたような広い河原にはその昔、川を行き来したスターンホイラー (船尾外輪船) が陸揚げして見せ物になっていた。盛時を偲ぶ豪華な船室も、今は昔の夢。すべては「金」を取り尽くした栄華のちまたがゴーストタウンになった象徴であった。

街は駐車場を中心に線路に沿って僅かばかりの拡がりを見せ、店は外観よりは中の方が余程モダンで、厳しい冬に備えての事と思われる。本屋さんとスーパーを兼ねたような大きな店には真ん中に赤ん坊の頭大の砂金が飾ってあった。(こんなのを見つければ一生食って行けたらう。)

ユーコン川の観光船、バスや鉄道で行く歴史散策、野外に転がるゴールドラッシュの遺品など見物するものは沢山ある。とりわけ有名なのが渓流釣り。釣り上げた巨大な魚と子供が並んでいる写真が至る所に飾ってあった。北緯61度、白夜の土地で、夏には、黄昏は10時頃だから遊ぶ時間は充分にある。

無限に広がる原生林、中を流れる大河、そして荒涼たる原野。人跡まれなこの地の冬はどのような厳しさか想像を絶するものがある。

このような厳しい自然の世界だから人々は助け合いの精神に満ちている。だからユーコンには「ユーコンの掟」がある。「飢え凍えた人をいたわれ、山小屋に鍵をかけるな、困った人は誰の小屋に入ってもかまわない、帰るときには名前と食べた物と、それらを何時返しに来るかを書き残し、薪とマッチを乾かしておけ、金を盗んだ者は射殺する」というもの。観光客はこれを渡されて、この地の冬の厳しさに思いを馳せるのである。

ユーコンまで行くのは大変だが、シアトル市内のバイオニアアー広場に「クロンダイク博物館」というのがあって、ゴールドラッシュ時代の写真をはじめ当時の道具、資料が展示してある。シアトルなら行く機会もあるでしょう。是非見て下さい。